

戦争を止めさせるには、情報が効果的！

辻野 雅香

2004年5月10日(月)

1年程前、イラク戦争終結(?)直後、倒され、引きずり回されていくフセイン像の頭部を叩いていた少年がいた。ハッサンという、フセイン政権下でいじめられていたクルド人の子もだった。その子が、戦後1年たって、またテレビの映像に登場した。彼は「(戦前と比べて)生活は変わっていない。まだサダムの方が(アメリカより)ましだった。」と、話していた。今は、アメリカ兵のお使いで小遣い稼ぎをして、何とか暮らしているが、いずれ軍隊が引き上げれば、彼の一家は収入の大半を失い、路頭に迷うとのこと。複雑な思いで、そのドキュメンタリー番組の一部を見ていた。

冒頭、戦争終結(?)と記したが、最近のニュース報道を見聞きする限り、とても戦争が終わったとは言い難い状況のようだ。毎日のように戦闘が続き、多くの人命が奪われ続けている。そして、日に日にイラクの人々の反米感情が高まりつつあり、人質事件、テロ攻撃などが頻発している。憎しみの連鎖がますます拡大していくばかり・・・。

そんな最中、CIAや、上官の命令で、アメリカ軍兵士による捕虜収容所内でのイラク人虐待事件(のみならず、虐待死の情報も!?)が発覚し、米英政府が、国民の信頼を失い、両首脳の進退問題や政権維持の危機に発展する可能性も出てきた。「テロとの戦い」という聞こえのいい大義名分(建前)の影に見え隠れする、アメリカの石油戦略の野望(本音)の犠牲となり、多くの人命を奪われ、国土を蹂躪され、主権を脅かされ続けているイラクの人々にとっては、「鬼畜米英」(死語?)が去って、必ずしも平和がすぐ到来するという保障はないにせよ、少なくとも自国のことは、他国の内政干渉に妨げられることなく、自分たちが納得のいく解決の道を模索できる、民族自決の権利の回復がもたらされるかもしれないという、かすかな希望が生まれてきたのかもしれない。

まさに、命をかけて、戦地を駆け巡り、貴重な映像証拠や情報を世界中に発信し、アメリカ軍の許すべからざる恥ずべき行為を告発した、国際ジャーナリスト達の勇気ある仕事に敬意を表する次第である。ブレア首相や英国政府も、すでに国際赤十字から3月ごろに、このことを知らされながら、今までひたかくしにして来たため、適切な対応を誤ったと野党からの非難を浴び、窮地に立っているとのこと。占領軍の中心的なこの2カ国の撤退を促す決定的な情報や、スキャンダルがもっと出てくれば、両国の世論が変化し、世界中の反戦の運動が実を結ぶであろうと考え、武器を持たずとも、戦争は止められるのだなあという思いを強くした。

人間の尊厳を脅かされ、被差別の立場におかれた人々を救うため、自分の命を危険にさらしてでも、戦場に赴き、真実を伝えようと奮闘努力している多くのジャーナリストの活動を賞賛するとともに、憎しみの連鎖を解き、一日でも早く、イラクに、そして世界中に平和が訪れることを祈ってやまない。そして、何よりも、1200万人のイラクの子どもたちに平和な生活を！

